

術後疼痛管理に関する研修会受講による臨床看護師の学び

キーワード：術後疼痛管理、臨床看護師、研修会

○井川由貴¹、遠藤みどり¹、城戸口親史¹、山本奈央¹、藤森玲子²、星野裕美³、中込洋美⁴、篠原昭子⁴、渡辺美保子⁵、牛山佳菜⁶、沼倉聡子⁶、峯松昭子⁶、梶原絢子⁶、山本真基子⁶、脇本雄文⁶（¹山梨県立大学看護学部、²北杜市立甲陽病院、³加納岩総合病院、⁴山梨厚生病院、⁵市川三郷町立病院、⁶山梨県立大学大学院看護学研究所）

I. はじめに：術後疼痛は患者が経験する痛みの中でも、最大の急性痛の一つであるにもかかわらず、最近まで術後疼痛への対策にあまり関心が得られていなかった。海外では、看護師を対象とした術後疼痛管理に関する教育の効果が報告されているが、我が国では看護師への教育的な取り組みは十分とはいえない現状にある¹⁾。A県の術後疼痛管理に関する研究会では、臨床看護師を対象とした術後疼痛管理実践に関する研修会を開催している。今回、研修会受講による臨床看護師の学びの内容について示唆が得られたので報告する。

II. 目的：術後疼痛管理における臨床看護師の実践力向上を目的とした研修会による学びの内容を明らかにする。

III. 方法：

1. 調査対象者：平成 20、21 年度に A 県の術後疼痛管理に関する研究会が主催する研修会を受講した看護師 24 名。
2. 研修会の内容：研修会基礎コース（手術療法に伴う痛みの管理、術後疼痛のメカニズムと薬物療法、術後疼痛管理における看護倫理に関する講義）の受講者を対象に、実践力育成に焦点を当てた実践コース（術後疼痛管理に関する視聴覚教材を用いたグループディスカッション、PCA ポンプの操作体験、術直後を再現した模擬患者への術後疼痛管理の実践内容をグループで検討した上で実践）を実施した。
3. 調査内容：研修会終了後に、研修内容の理解度や学びが深まった点、看護実践への活用などについて自記式質問紙にて調査を行った。
4. 分析方法：自記式調査票により得られたデータを研修会の学びの視点からコード化し、類似性に基づきカテゴリー化した。分析は学術的視野を有する看護学研究者とともにを行い内容的妥当性を確保した。

IV. 倫理的配慮：研修会終了後に、参加の中断は自由であること、対象者の所属機関とは無関係であり不参加による不利益を被らないこと、また学会等での報告をする旨を説明し同意を得た。調査票は無記名でデータの匿名性を保持した。また本研究は山梨県立大学看護学部の倫理審査委員会の承認を受けて行った。

V. 結果：

1. 対象者の基本的属性
臨床経験年数 5 年未満、5～10 年、10 年以上の看護師がそれぞれ約 3 割で、消化器外科、胸部外科、泌尿器科などの外科系病棟に所属している看護師が約 7 割であった。
2. 術後疼痛管理実践の研修会（実践コース）受講による学び

内容分析の結果、臨床看護師の学びの内容として 68 コードが抽出され、類似性をもとに「実践の見直しや教育・実践への活用」、「医療者間の情報共有や連携の必要性」、「術後疼痛管理の系統的・累積的知識の獲得」、「実践的体験学習の効果と強化希求」、「患者主体の全人的ケアの大切さ」の 5 カテゴリーが抽出された（表 1）。

カテゴリー	サブカテゴリー
実践の見直しや教育・実践への活用	実践への活用
	実践の見直し
	スタッフ教育への活用
医療者間の情報共有や連携の必要性	スタッフとの情報共有の必要性
	他機関との情報共有
	医師との連携の必要性
術後疼痛管理の系統的・累積的知識の獲得	PCA の体験的知識獲得
	疼痛・鎮痛薬に関する知識獲得
	多角的・系統的な学びの積み上げ
実践的体験学習の効果と強化希求	体験学習による術後疼痛管理実践のイメージ化と理解
	患者体験や複数事例の組み入れ（課題）
患者主体の全人的ケアの大切さ	患者主体のケアの大切さ
	根拠に基づく総合的・多角的な痛みの評価とケアの大切さ

VI. 考察：臨床看護師は、本研修会の研修内容が日常の看護における【実践の見直しや教育・実践への活用】に役立つと感じ、自らの看護実践だけでなく、新人看護師の育成やスタッフ教育へ活用できると認識していた。また、術後疼痛管理の実践における【医療者間の情報共有や連携の必要性】を改めて感じ、スタッフや医師だけでなく他職種間での情報共有や連携をもとにしたチームアプローチの必要性に気付くことができていた。さらに、一般的な基礎知識からより臨床的な内容へと学びが積み上げられる研修会に参加することで、【術後疼痛管理の系統的・累積的知識の獲得】ができたことと認識していた。またグループ討議や演習など実践の再現による体験学習から、実践のイメージ化が図られたと実感するとともに、さらなる学びとして患者体験による学習方法や複数事例の組み入れを要望するなど、研修会受講による【実践的体験学習の効果と強化希求】が明らかになった。また臨床看護師は、研修会受講により患者目線で主観的痛みを捉える大切さや根拠に基づく総合的・多角的な痛みの評価の必要性など、【患者主体の全人的ケアの大切さ】に気付くことができていた。

このような研修会を企画実施していくことは、より質の高い実践的な術後疼痛管理の向上に貢献できると考える。

¹⁾ 遠藤みどり 術後疼痛をめぐる動向、看護技術、Vol.54 No.7、2008